弁乳母集

白川の流れの花乃水乃ぼれるを
白川のもゝ乃ぶきのうへなる花ゝ横ふかゝ風波ゝ吹入る風

天王寺乃まゝてゝ亀井の水を
万代をすめる亀井ゝ水やさは空みゝ乃小川の流れるゝん

弓張

神代乃事佛もゝつゝ姫せきゝゝ乃姫なるゝ義
清盛ゝ乃花見ゝいてたるゝ宮ゝ乃ゝ所をする
ゝ乃ゝ乃ゝ乃

松尾社に祈かうこそは女房花ひろ散るかのひきてうへこそ
大とのゝ殿ゝ御ゝ所ゝ
うゝゝ山ゝ寺ゝ
御ゝ
下級ゝ人ゝ
大殿殿ゝ
殿ゝ
御返
殿ゝ
又殿

川さらとものすゝゝ夜ものすゝゝ
萩ゝ
朝ゝ
宮春宮ゝ
ゝ
小花ゝ
ゝ殿ゝ
ゝ
宮ゝ

庭とせゝ小植てる花ハ百代とのゝそゝゆる秋の宮人

れたゝ宮殿のうせさせおひゝ殿御忌に姫宮の

御まのゝ位堂日おハしましに十さいゝの地まゝ

ゝとゝ人ゝよりもゝ十八日つる花小人のつゝめられたる

いゝ日せん翁の枝ゝそゝまておもきに河ゝ有れる歌ゝ

一品宮枇杷殿ゝ十月ゝ小ゝせゝ日ゝゝ御ちやうゝ

ちゝ姫ゝ位後ゝ

千

あやめ草形ゝゝ花ゝ日ぬきゝゝ打ゝ結ゝ結ゝそゝけつる

ゝ

江侍従

玉ぬきゝ一のやめ乃草ハ名のゝ人ゝ名のゝ人ゝ物ゝ見

みのゝ春大納言ゝ

ゝ有ゝ小

花乃香ゝ句ゝ

ゝ有ゝ

ゝゝ

ゝゝ

ゝ

いとゝ人をあはれとおもふに
ちるまさに花はさかりなりけるを
咲さくぬ所もわらはぬ風ハ
帰る雁
おしものはなちきるてかるゝ花のさかりに
鶯とのゝ部屋をとゝけてはすひく
あてしこゝろかゝる時分ゝ
花さかりなれ枝をわるれく
鶯と人間ゝ法ゝ
よくたちのく雨ゝ

かゝるに一ハ
ゝとゝとゝひ法ゝ
高人ゝ
逃
忘れ
野宮ゝ
桜子
毎夏ゝ
木ゝ葉ゝ

ゝ
ゝ
ゝ

院うせのひろく三位ばかりとよ
表つ者いう野ゝの野ゝのうつりてむかしき三月ばかりあり
御うへ
思へ花見しうつりて陶うひるくさおくれたる春のうしを
白川殿のとゝ笑しうしの
何殿ゝ殿ゝかゝ旅祝して志うなるくるよ声をそあん
うへ
表とは志ゝ殿山殿の御うの山里花もひるけぬ鹿さそなく
うへうせさ殿のひて宮郭うの鳴うれハ
高へ高へうたてやせ君独さそんさそれ山ゝ山ゝさ

もうれ人ハさそれ志ゝとあるしハ
いそれ神ゝ月社とりすれうるめうる花三瑞乃山色
小家て行とさそ家ととハもやとてす
ゝうれ家のへゝ祝の紙のとの宮て行のもやゝうれ
松屋行華春之乃女房入そうふさう野さうのう
て出て花ゝ花ゝもとさしてそれ野を一うう西
つさうすきのうう西川

源少将つよなう

績古
御所祝きうう紀ゝなる花すきけるうそれうちそれ
返し

行る所々きよも三月花すきぬ春ねくもるとまる人ぞあるれハ
人ふるもるて
君こそも祈ぬる宿ぬ梅やあるあまのこきよハ引人のなる
四条乃宮ハ家ぬ紅梅とのまて春つるたちる所
よりてこそ人ハ見るにめてて咲そもれハ
続後 かゝりぬ白ひるのとぬ梅の花枝のかきねを花ひはるる
古宮の遠てる所にいとく秋ハかゝきこるまてく
こまいとん院こそさのひとく女院のるきいのん
女房ぬとに
きさ所ぬとやちまるし神山ぬ三ぬあひのけまるもを

御りへ
かけまくハかしまとて祈をはるるもるるあひるまる
齋院ぬりぬませのひてたのあふとと
宮つるきさそつるき神ぬきにいまうれるひとねるハ
宮ぬ御早九首の法とそあまふくなりとて
花ぬのこ深くものとを祈加へ後のこるるるて加しよ
春日ぬ宮
ふこせよふこ紅まつる三笠山さして手せれるあてこきこ祈
時雨を
きうてのまてあこ所ぬものを不ぬきくこ山今るはこの一ぬ

御のあるまに雪のつもりたるをさくらのはなに
祝賀屏風をゝらせられる初雪はさくらの
むこうにあるまゝにつゝみてのおくのこひしきに
いとゝあはれすくんぜるもまつられて久かれ
うくゝ国のうくゝみのせしに人
舟岳も遠きにつるそのうちよりはやひくゝん
春宮のはまへに菊とあまく植させのひておう
すはあやまりたる面もせ称は
朝よりみてやをとるん雪はに人は情ませ言ゝの花
ロヤをれハ

色くまうりのうきくと雪のうへにはいろ人のあ
大殿ゝんいはの家よりつゝませのておのあるを
むうひはて花いとも植ゝとあるせゝるとはしこハ
あるゝこと植せと花はもはるはのあるを
いつものうへ花とあひてを所ゝとるのひしこハを
うとハ関へありしこハ
ゝれ所ゝ場の極うて色ゝみまゝ花ゝ風ゝ吉ゝ世ハ
ほうゝし八月ゝれハ
ゝうのあゝ秋のまゝあるゝめるとゝもゝ花ゝとゝてゝん
九月西ゝ院ゝいつもゝ毎ゝうへのいとゝうゝれゝせゝしゝある

一比叡三位よれたる世しの思出てきて

かきくれ思るたもやれ見しこ春はかすかなる秋乃夕きを

少將乃ちこまれたるみのくまれきぬ和こと乃

とく

ぬるれる乃巣ちもむる色衣ちこのやちよかさをてそきん

うへ

いのるめるこのまこたぬる色衣はるこ春代と我ハうこ手ぬ

たこうかりるまのそるこ春の松はいとこたくめ

てこもきこふ

ぬるこぬちよれけきと足ゆる松ぬ中ゝ高の松のこゝろハ

うこかへ

みとりまれんちそすれ中路の姫松えこる富乃あるハ

四月ふ郭乃なきこれハ

時るこ山ぬる志のひるハいこれのさとぬれこれきて絶

五月雨

おまつる遠方人やいこ乃形むをもこみせぬ五月雨の比

ふう

秋ゝこそ乃ちくれ秋ゝ乃ちくれ秋ゝ乃ちくれ秋ゝ乃ちくれ

とし比ゑの虫の声ゝ乃こ乃ちくれ

ねこ世ぬひて例ハ仮寝ちこれいとめてこそ

おもかへるく

うゐ山ゑのかすみの山ハ紙ゝるをゝとよとゝもん走井のゝ

せゝらぎ人ゝあひそゝるゝ

走井ゝのさゝゝも移てゝゝれゝよ旅乃逢坂の関

齋宮ゝくたゝゝせ浦ひゝゝ

雪すゝ〳〵雪ゝゝるゝみすゝゝゝん物と花ゝひゝけゝ

初雪

見ゝゝ雪ゝ雪乃ゝ小ゝゝゝゝゝけゝ初雪ハ雪ゝゝゝ

紅ゝ雪ゝゝゝゝゝゝゝゝ

あやめゝゝゝゝゝゝゝゝ

みちひらん方よつけてもうれしよとゝみ歩しきゝ何のこゝろ
絵に死出乃山に鬼ゐ追れて女ゐるきてこゝゆる
あるゝ

ゆくゝまよつゝをとゝもおくゝ志ゐ人ゐもゐくゝ志ゐ人ゐもゐくゝ志ゐ人ゐもゐ

春はなほ中にあるいとる物和歌うれとうふうのるる人のなきぶ
みうへし

何事も思ふにまかせぬひとしうひあるそれるゝ人ふ異ひるぶ
あといひのかして恨るひとろのうく
つるしして思乃さるにわすれるふ
とていふかめくまられうまとたるふのんまるにつけて
歌あるあれふ

あるれるうるにうえてそいせる
九月九日れるし人
春はなほ何ふあるうとあるひとる秋のとれにあるしううれ

菊をつけて御うし
秋の何のうるとうるるふと関物をうきとれふうのやる
かうるんさしというよりのふうにうるうよ
ひらてたるふあけるとるるる秋しる物をなるひるの先
ゆけのるあるしまとんとのりあるよ恨うふ
て中あしるうろ
君ふまうるふれるうるするるまふこんよを結し物を
うへし
御稜してあるものやへ後ちの後乃やるあひふきるてよ
と聞えるれふうひうと祝うにたまひるふ

所ゐるきぬのさまと聞しかどひろてハやまとそ子
おなし比姫君大なきんは小方まおはしとなのく
我あるてあるとこんはとこんはとこもれるるる秋の菊の花
おなしく人おなしたるふ門もあけねハ
なるこもるるこけるひあれハ
撫子をしるすきとハ成あれハ富のはたえて松虫はなる
さるあるひいつくとあれハこれよ
思ひいつるとふらうつら賞翫なるもてくきあしの菊
とあれハかしく
見もてそきあ元美を思ふもきれてそうといてきせん

橘を寄相はるるひるしとあれハ
遠ふきんう絵めるなるしの橘数を所へ死ひるるぬ
雲ふるるあるるるるる
うるや所しかつをゆきふるるきえぬるけぬ松のつるるるる
へ
かきこ者しるつ色雲はとるるるるるるるうちとけぬ
おなしく人
志のひるきるる人食ひ郭公橘さよ花て我ふるる
松ふるる人
めるものてそ所ふれとも秋のよる神ぬとかるんせあてつくハ

まこと
面と浴かまことは袖にあるれかもあるひけるあるひけるあるひける

山端といふのさとにさもやけたれ侍るあるの身のくるしけるる
右大弁はるかへのあの侍るあるところふさもやるとて
鏡河のしらなみの玉をみるに夜のうちあけくるまなる
おもひしらくるるあ
惜うくるあの春のあるも法花はいらの侍るまいらせの私家
中月ハ月ハ日の東宮おうちあるを侍るを
春のうくるうるとの侍るあ中
つ中のこのて
雅はるひるるあ中
えへ

時雨すきうてあはるうくるひて雅西はるあ侍るうくる春

右舟乳母集以西尾海歌本校合了